

一心太助の天秤棒 ～前の籠には責任を、後の籠には信頼を 肩に担いで売り歩く～

越谷市議員 白川 ひでつぐ

シリーズ/NO 151号



Web サイト



Youtube



Twitter



Spotify

駅頭は小さなドラマの連続だ！

初当選以来6期21年間毎日毎朝続ける東武鉄道の市内6駅での朝の駅立ちは、通算4200日を超えました。私の日々のツイッターのつぶやきから、転載したものを含め、駅前の様々な市民との出会いや何気ない駅前の風景、市民の日常を通した暮らしへの息遣いをエピソード集としてシリーズでお届けしています。

YouTubeの白川ひでつぐ公式チャンネルの登録者は280名を超えました。引き続き配信を継続していますので、これまでのご協力に感謝し、更にご登録をお願いします。

チャンネル登録



冒頭から波乱含みの3月越谷市議会。最終日は懸案の教育長人事と市長の処分

3月越谷市議会は、2月25日午前10時から始まり、3月18日異例の午後7時に終了した。初日には、2人の議員が提案者となった(私は賛成者)「高額療養費制度の見直しは慎重審議するよう求める意見書について」の取り扱いを午前9時30分からの議会運営委員会で協議した。通常議員提出の意見書(案)は、最終日に提案、審議、採決するのだが、特別の事情(例えば災害が発生し、政府への支援を求める等)がある場合は最終日に限定しない(“先議”という先に議決する意味)ルールがあり、議運の協議となった。その理由は、意見書の提出先である国会が、3月市議会最終日前までに閉会する可能性があることから初日の提案を希望し

た。しかし、本会議に先議するには、議運の全会一致の同意が必要であり、これまで自民党や公明党は政府与党であり国会審議中の内閣法に反対する意見書にはあまり賛意を示して来なかった経緯があり、私は先議が必要との理由を事前に準備して臨んだ。

ところが、実際はなんと全く異論なく実にあっけなく自民、公明が賛成し全会一致で初日の先議が決定。

そのため当日の本会議場では市長提出議案の提案、説明に続き、この意見書が提案され全員賛成して採択された。(何故自民党や公明党が先議や意見書に賛成したかは、「慎重審議するよう求める」となっており、正面から反対の標題にはなっていない。また7月の参議院選挙を前に政府事態がこの「高額療養費制度の見直し」の批判にさらされている等、推測だが)

最終日のこの日、12月市議会で否決された田畑氏の教育長人事で異常事態に陥っていた人事議案で、新たな議案(野口教育長職務代行者)が追加提案として出された。人事議案でしかも教育長という重職の否決は市議会史上初めてだったのだが、今回は採決の結果賛成多数で可決された。ただ私だけが反対票を投じた。

12月議会での市長からの提案理由は不登校やいじめ問題が深刻であり、田畑氏の校長在任中での劇的な問題解決能力を高く評価するものだったが、市全体では、不登校が年間500人前後と高止まりの状況は全く解決していない。野口氏が校長在任中も教育委員会の職員であった時代も、更に職務代理者時でもその意味では全く実績を上げていない。

果たして、今後問題解決が出来る見通しが効かないのでは。ただ最も重要なことはこの様な判断材料や本人の思考や問題意識を直接知る機会がないまま賛否を迫られる事にある。今回の人事だけでなく、これは市長側にも議会側にも大きく改善する課題として教訓化すべきだろう。他の人事では、2期8年間副市長を務めた青山氏が退任されて、新たな副市長人事が提案され全会一致で可決したのだが、その副市長の定数を現在1名から2名に増員する議案も提案された。平成20年6月以来現在の1名制を続けて来たが、近年災害や治水対策が急務であり、埼玉県や国との関係性を深くするため、当面国交省からの人材派遣を求めて行く、との提案理由だった。

この副市長の定数を巡って、嘗て私は当時2名制だった定数を1名にする請願運動(裏へ)

に深く係わった経緯がある。当時2000年に地方分権一括法が成立し、国と地方自治体はこれまでの主従の関係から対等な関係に仕組みが劇的に変化し、所謂中央との太いパイプ論から脱却していくことを目指していた。

つまり、自治体こそが全ての決定権と執行権を行使する主体であり、補助金等による政府からの指示、命令を排除していくことであり、中央省庁からの人材派遣は極力停止することが、請願の主旨であり、請願は採択された。

しかし、今回私は2人制に賛成したのだが、上述した意義は今も変わってはいない。ただ今後施設やハード面ではなく、人材育成や地域共同体再生のための町づくりや人権を基軸としたソフト面（人づくり）の強化が何よりも問われており、その領域のプロを副市長として配置が可能となる、との理由で賛成した。

更に追加議案として令和6年度に職員の不祥事が8件も起きており、その責任をトップとして示すため、市長は、3月分給与の20%減（21万2000円）、副市長は同じく15%減（13万2300円）を減額する、と提案された。本会議場では、質疑が相次ぎ市長は、今後職員研修の内容や時期、また組織の在り方を検討していく、と答弁が繰り返された。

私も質疑に立ち、①今回の減給処分は、まず組織の最高責任者として問題の所在を市民に可視化するためものではないか。②これまでにないほどの懲戒処分となっているが、これは越谷市に特別の事案ではなく、社会が劇的に変化している中では、これまでの様な考え方や生活の規範が揺らいでいる、または消滅している状況の現れではないのか。

実際に3人の職員は、職場ではなく、私生活上の問題を起こしていることに関連している。

従って綱紀粛正的な対応ではなく、現代の公務労働とは何か、これからの公務員とはどのような能力が求められるのか、根底的な認識がまずトップに必要なではないのか。（最も斎藤兵庫県知事の様な、そもそもトップとしての最低の資質もなく、この間問題となった事案に対する第三者委員会報告の中で明確に法令違反と指摘されても、一つの意見だと言っているのける姿勢は論外だが）③8件の中に市立病院の職員が4人もいるのは、現在病院経営の赤字脱出のため様々な施策に取り組んでいるのは評価するが、そのことが職員への日常のプレッシャーや抑圧、行き過ぎた管理等がマイナスに影響した結果ではないのか、と。（3月18日・火曜日）

男尊女卑依存社会からの脱出・家父長制の中で刷り込まれて来た“女はこうあるべき”“男はこうあるべき”

3月22日、越谷市中央市民会館で開催された男尊女卑依存社会からの脱出一性犯罪加害者も被害者も生まないために一の講演会に参加した。講師は斎藤章佳氏（西川口榎本クリニック副院長）。

その中で斎藤氏が著者の「男が痴漢になる理由」が紹介され、痴漢への認識を崩すテーマで①性欲が強すぎるから？②非モテ男子だから？③世の中には「痴漢OK子ちゃん」がいるはずだ？④セックスレスだったから？⑤親の育て方に問題があった？等が良く上げられるが本当にそうなのか。

男尊女卑的価値をインストールするのは家庭、学校、メディア、社会（職場）など多岐にわたっているが、その行く着く先は、家庭（家父長制）だ。子どものころから家庭の中で植えつけられた「女はこうあるべき」という教えは、「男尊女卑の種」として学校で芽を出して、メディアから水を与えられ、大学を卒業することには社会によって花開く。特に家庭内では同性の親からのジェンダーバイアスを植え付けられるケースが多い、との指摘に共感した。

（3月22日・土曜日）



コミュニケーションスペース“ガヤチル”オープン、私の事務所1階に。

一般社団法人・ソブリンムーブメント（私は副理事長）の地域展開の拠点「ガヤチル」のオープンセレモニーを開催した。カフェバーとしても使用する他、このスペースは地域で何かを求め、社会的な関係性を築こうとする様々な市民に開放していく。（3月23日・日曜日）